

## 戦争と美術 カンブレー同盟戦争とヴェネツィア

大阪芸術大学 教養課程 教授 石井 元章

戦争が美術に及ぼした影響については、爆撃等による作品の破壊や、戦争画の制作などが中心となって論じられてきた。本研究は、「いとも晴朗なる共和国 La Repubblica Serenissima」と呼ばれ、千年以上に亘って存続したヴェネツィア共和国が、存亡の危機に瀕した未曾有の国難カンブレー同盟戦争を取り上げ、それが美術制作に及ぼした影響を、いくつかの側面から検証することを目指す。紙幅の都合から本報告では、複雑なカンブレー同盟戦争の経緯の初段階のみを追い、作品に現れた政治状況を具体例に基づいて検証する。

1508年12月10日ローマ教皇ユリウス2世はフランス王ルイ12世、神聖ローマ皇帝マクシミリアン1世、アラゴン王フェルナンド2世、フェルラーラ公爵アルフォンソ1世・デステ、マントヴァ侯爵(1530年から公爵)フェデリコ2世・ゴンザーガらヨーロッパやイタリア半島の主な君主たちとフランスのカンブレーで同盟を結び、本土に領土を拡大し続けるヴェネツィアに宣戦布告した。フランス軍と神聖ローマ帝国軍はヴェネト地方を制圧し、1509年5月14日ヨーロッパのほぼ全土を敵に回したヴェネツィア軍はクレモナ近郊のアニャデッロで手痛い敗戦を喫する。この敗走によって共和国は本土に持っていた領土をほぼ全て失った(Frederic C. Lane, *Venice: A Maritime Republic*, Johns Hopkins University Press, Baltimore 1973, 第17章 The turn westward III/Contests for Power: The Sixteenth Century等)。本報告で扱う二つの作品に関する重要なできごとにも触れておこう。前述のアニャデッロでのフランス軍の勝利後フェルラーラはヴェネツィアに対する牽制として、フランスへの接近を図る。ところが教皇は、フランスがイタリア半島で強大化するのを恐れて、フェルラーラのフランス接近に不快感を示し始める。フランスとドイツがヴェネツィア攻めから手を引き、教皇もヴェネツィアに対する手を緩めた結果、フェルラーラはヴェネツィアと直接対峙することになる。1509年11月ヴェネツィア船団がポー川を遡上してエステ領に侵攻し、ポレセツァ近くでフェルラーラ勢と戦闘になった。公爵アルフォンソ1世とその弟で枢機卿のイッポリトの軍勢は、ヴェネツィア軍を見事に撃破した(脇功『アリオスト 狂えるオルランド』名古屋大学出版会 2001, pp. viii-ix)。これによって、1484年に父君エルコレ1世が手痛い敗戦を喫して失ったポレージネの領土を、アルフォンソはヴェネツィアから奪還することができた。

ヴェネツィア側の状況を図像化した作品として、ヤコポ・

パルマ・イル・ジョーヴァネが16世紀後半に総督宮の中枢、元老院の間のために描いた油画《カンブレー同盟の寓意》を挙げることができる。画の中では、総督レオナルド・ロレダンが擬人化されたヴェネツィアを冷静に導き、彼女は雄牛に乗るエウロパ[ヨーロッパ]の侵略軍に対して攻撃態勢の獅子に続いて正義の剣を振り上げる。「豊穡」と「平和」の擬人像がヴェネツィアに続き、その上に描かれた翼のある「勝利」はその結果を保証する。これは、カンブレー同盟戦争が終結した1521年から、かなりの年数を経た1593年に描かれたものであるが、天の懲罰とも言えるこの戦争の後、ヴェネツィアが公的な平和の擁護者となったことを示しているとデイヴィッド・ローザンドは言う(David Rosand, *Myths of Venice*, North Caroline University Press 2001, p.49)。「正義」と同様に「平和」は、戦いの陣容を整えたヨーロッパに対するヴェネツィアからの贈り物であった。獅子は飼いならされたかもしれないが、共和国の平和的性格は聖マルコの平和の中に言明されたとする新しい修辞を持つメッセージを、獅子は携えたとローザンドは考えた。

他方、エステ家の宮廷彫刻家となったヴェネツィアの彫刻家、アントニオ・ロンバルドは《アルフォンソ1世・デステのための浮彫群》の一枚《水上のヘラクレスの神格化》において、前述のポレセツァでのエステ家の勝利を寿ぐと、ピサ大学教授ヴィンチェンツォ・ファリネツァはいう(Vincenzo Farinella, *Alfonso I d'Este: Le immagini e il potere*, Milano 2014, p.162)。本来のギリシア神話におけるヘラクレスの神格化は、ネッソスの猛毒により英雄の人としての肉体が壊死し、荼毘にふされてオリンポスの山頂に上っていくというものである。しかしながらこの浮彫ではそれが水の上に描出されている点が異なる。ファリネツァはそれが先ほどのポレセツァでの勝利を意味するという。浮彫面右側に掘られたヘラクレスの像がヴァティカン宮殿ベルヴェデーレの庭に置かれたばかりの所謂《ベルヴェデーレのトルソ》をモデルとしていることは誰の目にも明らかであり、かつギリシア語名ヘラクレスのイタリア語名はエルコレで、アルフォンソの父親の名前と同一である。アルフォンソは父君を深く敬愛しており、父親が味わった敗戦を取り戻すものとしての自らの勝利を、理想的に父の勝利として、明らかな神話の衣を着せて表したものであるとファリネツァはいう。